

『萬葉集禽獸蟲魚草木考』の 成立について

和田義一

はじめに

わが国で本草学が盛んになるのは江戸時代に入ってからである。李時珍の「本草綱目」が輸入され、その和刻本が寛永一四年（一六三七）に刊行されてからは、「本草綱目」を中心に、本草学は発展して行つた。日本人自身の手になる本草書も著述、刊行されるようになった。貝原益軒「大和本草」（宝永六年（一七〇九）刊）、稲生若水「庶物類纂」（天明三年（一七八三）成立）、小野蘭山「本草綱目啓蒙」（享和三年（一八〇三）から文化三年（一八〇六）にかけて刊行）などがその代表的なものである。その背景には八代將軍吉宗の学問奨励、実学尊重、物産振興の政策路線もあった。

こうした本草学研究の盛況に刺激されて、万葉集研究にも新しい研究方法が生まれた。万葉集所出の動物、植物を鳥・獸・虫・魚・

貝・草・木に分類し、考証し、実物と比較する研究方法である。それは本草学的知識を基盤にする研究方法である。本草学は本来「薬」の学問であるが、本草学的知識を応用して万葉集を研究するとき、本草学の功利的、実利的な目的から離れて、別個の学問領域として成立する。万葉集研究の一領域としての学問である。それを万葉博物学と呼ぶことにしている。

もっとも、集中の鳥獸虫魚草木を分類することは、すでに契沖が「萬葉代匠記」の「惣釋」篇で行っている。元禄二年（一六八九）から同三年にかけて改稿・完成した「精撰本」の「惣釋」篇第二部に「集中鳥獸蟲魚」「同草木」という項目があり、ここでは動物・植物の分類がなされ、イロハ順の配列がなされている。しかし、「鳥獸蟲魚」は約六〇項目、「草木附海菜」は約一六〇項目を挙げてあるものの、大部分が名前の列挙と集中所在の卷丁数の記載にとど

するものを選んだと見るか、仙覚自身の新しく加へた最小限の改訂と見るか、二様に考へられるが、卷十七以降見來つたやうに私は後者を執りたい」(八二頁)として、両本の差異に仙覚の手入れを想定された。これは卷二十を含めた上で結論であり、したがって本稿にそれを批評する資格はないが、卷十九以前については別案として示されたものが本稿の採るところとなった。

(14) 仙覚が自らよしと考えるものを採用するにあたって時に大胆であったのは、片仮名傍訓形式の採用からもうかがえる。

また、寛元本では在来の訓をできる限り温存することに努めたにもかかわらず、文永本では自らよしとするものに一本化したことなども、これに通底するのではなからうか。

(15) 卷十六目録における甚だしい誤りが手つかずであるのなどは、その訂正にしかるべき内容の理解が必要であり、それが筆写者には容易でなかったことを示唆するものであろう。

(16) はやく万葉代匠記(初稿本惣釈)に、卷十五以前はほとんど誤りがないにもかかわらず「第十六より、第二十までは、あやまれる事はなはたおほし。十六より十九までは、ことに愚拙のもの、しわざなり」とその疎漏についての指摘がある。

(きたい かつや 関西大学非常勤講師)

まっている。「呼子鳥」「山振」など二、三の項目についてのみ解説がなされているが、それらも本草学的知識の応用という点では皆無に近い。

また、契沖に続く賀茂真淵の「冠辞考」(宝暦七年(一七五七)成立)や「萬葉考」(巻一・巻二・同別記は宝暦二〇年(一七六〇)成立)なども動植物の解説はかなり精細になされているものの、本草学的知識の応用という点では契沖と同じく、皆無に近い。

萬葉集中の鳥獸虫魚草木を考証するという目的のために、本草学的知識の応用による述作・冊子の編纂が本格化するのは文化・文政期に入ってからである。

萬葉博物学書の中で、年記が記載されているもののうち、最も年代が早いのは小林義兄「萬葉集中禽獸蟲魚草木考」(文化一二年(一八一五)自序)である。同じ頃に成立したと考えられるものに伊藤多羅「萬葉動植考」がある。それについて、春登「萬葉集名物考」(文政六年(一八三三)自序)、荒木田嗣興「萬葉品類鈔」(文政一〇年(一八二七)自序)、鹿持雅澄「萬葉集品物解」(文政一〇年成立)などがある。さらに、西門蘭溪「萬葉草木考」(天保十二年(一八四一)自序)、高橋残夢「萬葉物名考」(弘化三年(一八四六)年記)などがある。年記の無いものには著者不明の「萬葉集名物考」(大阪府立図書館蔵)、著者不明・亀井交山画「萬葉集草木考」

(大阪府立図書館蔵)、千村仲雄「萬葉集類聚抄」(お茶の水図書館蔵)などがある。

ところで、「博物之学」という術語を使ったのは貝原益軒が最初(大和本草「巻一の「論本草書」)であり、近世博物学は益軒に始まるというのが通説になっている。江戸時代の本草学は時代の変遷の中で、やがて本草学・名物学・物産学といった諸学へと分科し、それぞれ独自に発展して行く。そして、益軒が当初「博物之学」という語を使ったとき、それは本草学・名物学・物産学の総名として使った。従って、厳密な意味での近代の博物学を指していたのではない。日本の博物学史研究の草分け的存在であった白井光太郎(文久三年(一八六三)生、昭和七年(一九三二)没)は「先生ノ時代ニハ今日ノ所謂博物学ト云フモノハナカッタノデアリマス。今日ノ博物学トハ先生ノ時代ノ博物学ト違ッテ居ル。其ノ代リニ、本草学、名物学、物産学ト云フ此ノ三ツノ科目ガアッタ。其ノ三ツヲ合シタモノヲ先ヅ博物学ト云フタノデアル」と述べている。

益軒が「博物之学」と言った時、それは本草学・物産学・名物学の総名としてであったが、その実用的・功利的側面よりも、それらの学問の持つ、宇宙や自然界を秩序づけようとする世界観・自然観により多くの関心が向けられていたのではなからうか。そして、自然界や人事にかかわる品物の客観的認識ということにより多くの関

心が寄せられていたのではなからうか。何故なら「論本草書」の中に「究其品物、通其性理、考其是非……辨其同異、而、極廣博、致精密」と述べているからである。その点で、益軒の「博物之学」は「名」についてその表わす実体を正しくつきとめる学」と定義される名物学とも深くかかわっている。しかし、「博物之学」は即名物学ではないのは無論である。

先に書名をあげた万葉博物学の諸書は、本草学的・名物学的・物産学的傾向を多かれ少なかれ有している。そして、それらに共通しているのは、本草学的知識を応用して、「名」について、その表わす実体を正しくつきとめようとしている点である。それらは実用的価値とは一応無縁であって、学問的立場からの著述と言える。益軒が本草学・名物学・物産学を総称して「博物之学」と呼んだと同じ意味あいにおいて、これらの諸書を万葉博物学書と呼ぶことにする。この小論では、先に書名をあげた万葉博物学書のうち、最初の「萬葉集禽獸蟲魚草木考」について、その成立過程と現代の万葉解釈学にとっての意義について述べたいと思う。

1

小林養兄の「湖魚考」は、日本博物学史の分野では比較的知られている。写本も十数種類が現存している。これに対し、「萬葉集禽

獸蟲魚草木考」は写本も二種類（東北大学図書館蔵本・国会図書館蔵本）のみであり、刊本としては「萬葉集古註釈集成」近世篇②の第十六巻として複製版（国会図書館蔵本のうち上巻）が出版されているだけであり、万葉集研究史ではその名前が余り知られていない。最初に小林養兄の略歴と「禽獸蟲魚草木考」の写本について概略を述べる。

小林養兄は「国書人名辞典」(第二巻)によれば、寛保三年(一七四三)生、文政四年(一八二一)、七九歳で没、墓は彦根市大雲寺にある、本姓藤原、名は養兄、通称は左内・村治と称した、近江彦根の人で、彦根藩士印具氏の家臣、藩主井伊直中の命により、琵琶湖の魚介を調査した、大菅中養父に国学を学び、海草・橋本経亮・藤井高尚と親交があったとある。

「近江人物志」には「藩主直中、藩の歩行戸田次郎右衛門及び養兄に命じ、費を給し、普く湖川谿洞の魚蟲を歴観せしめ、漁人に就いて探問訊究し、現物を見て其の形容を図写し、以て湖魚の状況を述作せしむ。養兄湖魚考二巻を撰びて之を呈せり。」とある。

印具氏は第十一代藩主井伊掃部頭直中(寛政元年(一七八九)四月から同八年十月まで在任)の中老印具徳右衛門のことである。十一代藩主直中の時代は藩の財政窮迫し、儉約令を出す一方で国産方を設置し、国産品の生産を奨励し、特産品の販売にも力を入れてい

た。そうした状況の中で「湖川谿澗」の調査が命ぜられたのである。「湖魚考」二巻」とあるが、他に図録一巻があったことは義兄自身はその序文で述べている。

「湖魚考」は上・下二巻で構成され、記載項目は上巻二〇品目、下巻三八品目である。最初に義兄の序文があり、「文化の三つ年の霜月のもちの頃」という年記が序文の終りに記されている。本文の記載は、初めに形態、生態、棲息地などを述べ、ついで「諸説」として「本草綱目」・「大和本草」・「本朝食鑑」・「和名抄」・「和漢三才図会」など、和漢の本草書や辞書・事典類の所説を引用するといった方法をとっている。

ところで、「近江人物志」には「国学を好み群籍に通ず。嘗て本居宣長に歌道を問ひ、殊に萬葉集を講究すること頗る深し。従て詠歌古風体を能くす。」とも述べられている。しかし、宣長の「授業門人姓名名録」および「來訪諸子姓名住国并聞名諸子」¹⁾には義兄の名が見出し得ないから、どれほどの直接交渉があったか疑わしい。「禽獸蟲魚草木考」の参考書目の中にも、契沖、真淵の所説は見えるが、宣長の所説の引用は皆無であって、宣長からはさして影響を受けていないと思われる。(附表(四) 引用書目一覽表)

さて、「禽獸蟲魚草木考」の写本は管見によれば次の二種類である。

1 東北大学図書館蔵狩野文庫本(第四門一〇四七六)(三冊)

2 国立国会図書館蔵白井文庫本(特一―二〇五四)(二冊合本)
1の第三冊(巻六)の末尾には「弘化二年^乙巳八月寫 平安榕室山錫夫」と年記及び署名がある。2の巻末には右の識語に続けて、

大正三年一月

白井光蔵

数年前狩野亨吉氏ノ藏本ヲ借受シテ写之

とある。「平安榕室山錫夫」とは京都の本草学者山本亡羊の二男榕室山本錫夫のことである。1は榕室によって弘化二年(一八四五)に書写されたものであり、2は1を書写したものである。巻数・紙数・一面の行数、一行の字数まですべて同じように転写されている。各巻とも二、三個所の字句の異同があるものの、ほぼ正確な転写本である。

以下、1により概略を述べる。表紙は縦二三・二センチ横一六・二センチ、左端上方に題簽「萬葉集禽獸蟲魚草木考」とある。内題は「萬葉集中禽獸蟲魚草木考」である。本文は袋綴、用紙は上下に墨の界線があり、縦に野線が入っている。片面(表・裏)各十行の野紙である。用紙の柱の下方には「読書室蔵」の印記がある。読書室は山本家の学問所である。紙数は第一冊が例言一枚、本文五六枚、第二冊七六枚、第三冊四八枚である。序文はなく例言がそれに代わるものとしてある。例言の末尾には「文化十二年八月朔 小林忌守 義兄識」と年記があり、これにより本書の成立を文化十二年(一八

一五」としている。成立年代が明記されている万葉博物学書の中で最も古い。

本書の構成は第一冊が卷一禽部、卷二獸部、卷三魚部、卷四虫類の四部四巻、第二冊が巻五草部、第三冊が巻六木部となっていて、動植物を六部に分類している。標題は「禽獸虫魚草木考」だが、内容は「禽獸魚虫草木」の順に配列されている。卷一の鳥類に「禽部」という名称をあてているのは「本草綱目」など中国渡来の本草書の名称を借りたのであろう。しかし、「本草綱目」の一六分類のうち、穀部・菜部は草部に含め、果部は木部に含めているし、また、「本草綱目」の鱗部は龍・蛇・魚・無鱗魚の四部で構成されているのに対し、本書はその中の魚類だけを取り出して魚部を設け、「本草綱目」の介部（龜・蛙）も魚部に含めている。従って、「本草綱目」の分類を厳密に踏襲しているわけではない。

本書には目録がない。例言に品目数が挙げられている。例言の品目数と本文掲載の実際の品目数とは異なっている。比較すると次のようになる。

	(分類)	(例言)	(実際)
鳥類		三四品	三六六品
毛物類		一〇品	一一品
魚類		二四品	二〇品

虫類	一〇品	一〇品
草類	九九品	一〇〇品
木類	五三品	五二品
合計	二二六品	二二九品

虫類を除いてはいずれも合致しない。合計も例言には二二六品とあるが、例言の各類の合計は二二〇品であり、本文に実際に掲載されている品目の合計は二二九品である。

このような不一致は後年に成立した鹿持雅澄の「萬葉集品物解」の「目録」にも見られることである。目録作成後、加筆・訂正などを行うことにより、項目の増減が生ずることがある。その場合目録をそのままにしておけば不一致が生ずる。本書の場合も、例言作成後の加筆・訂正による不一致ではなからうか。

本文の記載法はまず万葉集（テキストは寛永版本）所載の品目名を抜き出し、その下に所載の巻・丁・表・裏を記す。品目名の掲載は「例言」にも述べているように、同一品目名は音仮名・訓仮名・正訓字・義訓字を問わず、「文字異ナルハコトゴトク」あげるといふ方法を取っている。ただ、万葉歌の解釈が今日の水準から見て不十分のために「来鷲」^{ケルシホト}「何時鷲」^{イツシホト}の「鷲」や「物恋之伎」^{モノコヒシキ}の「之伎」までを鳥名としてあげている。また、動植物の分類面でも今日の学

問的水準から見て不備がある。例えば、卷三魚類に「鯨魚」^{イサナ}「河津」^{カハツ}が入っているし、卷四蟲類に「河爾」^{カニ}が入っている。江戸時代の学問的水準からしてやむを得ないことと言えよう。

品目を抜き出し、その次に各品目の考証が記述されている。考証には多くの参考文献が引用される。引用回数が多いのは「和名抄」と「本草綱目」である。考証の冒頭に「和名抄云」として「和名抄」の本文と「和名」を引用し、ついで「本草綱目」の記述を引用するのが一般的なパターンである。それに続いて本草学関係の諸書や契沖・真淵その他の諸説が引用されている。(附表四)

一方で義兄は生物学者でもあったから実地に山野湖沼を踏査、検分もしていた。実地の検分に基づく考証も多い。例えば「或日山中ノ谷間ニ鶯ノ巢アリテ中ニ三ツ四ツ卵ヲウミアルヲ竊ニウカカヒ見テ後其子ヲ取ント折々忍ヒ見ルニ」(巻一・「ほととぎす」)や「かたかご」は「山中ノ陰地ニ自然ニ生ズニ二種アリ、家園ニ移シミルニ正月末ヨリ旧根ヨリ芽出テ二月中旬花咲ク 其葉ギボウシノ小キ如ク一本出ルモノハ花不咲 二年出ルモノハ必花咲」(巻五・「かたかごの花」)などがその例である。

2

本草学関係の参考書として引用回数が多いのは「本草綱目」

である。「例言」にも「本草」ト云シハ「本草綱目」也 外ニ本草類ノ書多シト云ヘドモ「綱目」ハ後ニ二諸書ヲ引テ委シケレバナリ」と述べている。「本草綱目」について引用回数が多いのは「知要」と「抄説」である。「知要」については「例言」で「知要」ト云ハ去ル享保ノ頃日子根人三人集リテ「綱目」ヲヨミ考ヘテ書集メシヲ「本草知要」ト云 其中ヨリ取出タルヲ「知要」トノミ云ナリ」と述べている。享保年代(一七一六一一七三五)は義兄の生まれる一〇年から三〇年以前である。彦根にも「本草綱目」を研究するグループがあったことがわかる。「本草綱目」そのものはかなり難解であるからグループで討議し、簡明な解説を施した書物も多かったであろう。それらは出版されることもあったろうが、多くは書写されて伝えられて行ったのではなからうか。

「抄説」については「例言」に「抄説」ハ「本草綱目」ヲ近キ頃小野蘭山考ヘシ諸書ヲ集メテ其肝要トスル所ヲ抜書シテ「抄説」ト云 是ヲ多トレリ」と述べている。蘭山の本草学研究の集大成は「本草綱目啓蒙」であるが、その初版本の発行は享保三年(一八〇三)から文化三年(一八〇六)にかけてである。しかも、それは「衆芳軒蔵」版という私家版で出版されたもので、一般に販売することを目的としたものではない。従ってそれを入手することは蘭山と交渉のないものには恐らく不可能であつたろう。ただ、蘭山の講

義録は市中に出廻っていたらしい。それらの講義録は後に整理されて「本草綱目紀聞」「本草綱目会識」「本草綱目訳説」などとして現存している。しかし、もとの講義録そのものは断片的で、体系的なものではなかったらしい。

蘭山の本草綱目の講義は巻次の順を追ってなされたものではないという。本草綱目を三つの系列に分け、三系列が並列的に進められた。一系列は月に五日間、三系列合わせて月に一五日のペースで行われたという。一系列の講義は一年から二年にかけて継続され、三系列全部を数年かけて継続的に受講しなければ本草綱目の系統だった内容と形式を得ることができないようになっていたという。このような講義方式の意図は「自己の学説のいたずらな拡散」の防衛にあったと言われる。学問がまだ一般大衆に公開されておらず、秘説伝授的色彩が濃く残っていたようである。

このような当時の状況からみて、義兄の「抄説」なるものも体系的な形式・内容のものではなく、蘭山の諸説の雑多な集成ではなかったかと推測される。

「本草綱目」・「抄説」・「知要」の三書は義兄が最も頻繁に使用した本草学関係の参考書であった。それ以外の本草学関係では、貝原篤信（益軒）・松岡玄達らの名が数回見える程度である。

義兄自身の考説は「考」に示される。「考」ト云ハ己義兄が云事

ナリ」と「例言」で述べている。しかし、この「考」は第二冊草部巻五の半ば（なでしこ）までで、それ以降は「案」又は「按」がそれに取って代わる。例外的に「考」と「案」が並列に記述されている箇所（「わすれぐさ」）がある。「案」については「例言」には言及されていない。「考」と「案」が並記されている箇所があるところからみて、「考」と「案」は別のものである。「考」が義兄自身の説であるならば「案」は義兄以外の人の「考説」ということになる。

ところで、西尾市立図書館岩瀬文庫には二種類の「湖魚考」が蔵されている。上・下巻の一冊本（畑・18・28）と上・下巻の二冊本（畑・17・60）である。一冊本は漢字片仮名交じりの書体で書かれていて榕室の年記及び跋文があるから榕室の書写によるものである。二冊本は「読書室蔵」の野紙に漢字平仮名まじりの書体で筆写されていて、書写者の記名・年記はない。一冊本の本文の冒頭には朱筆で「平安亡羊山世福 校正」とあり、下巻末尾には同じく朱筆で「嘉永元年戊申之冬十一月 應萬里帆足先生之求騰寫併録家君之所旁記而遺之 平安山本錫夫」とある。「平安亡羊山世福」といい「家君」といっているのは榕室山本錫夫の父世福山本亡羊のことである。山本亡羊（安永七年（一七七八）生、安政六年（一八五九）没。）は小野蘭山の弟子で、寛政一二年（一七九九）に蘭山が幕命により江戸に移住してからは京都本草学界の中心となった人物であ

る。一冊本には五個所、朱筆による「案（按）」が欄外に記載されている。二冊本には一冊本と同一個所に「世儒案（按）」として朱の加筆が三個所ある。他の二個所は「世儒案」と断らないで、朱筆による訂正にとどまっている。一冊本は江戸時代の儒学者帆足万里（安永七年（一七七八）生、嘉永五年（一八五二）没。）の求めに応じたものだけに義兄の説と世儒の説とを厳密に区別している。二冊本はそれほど厳密ではない。「世儒案」とあるのを別にして、他の二個所は原著者義兄の加筆・訂正かとも思われる書込みである。

二冊本は「読書室蔵」の罫紙に書写されている。榕室は多くの本草書の類を書写しているが、そもそも書写の目的は何であったのか。それは本草学関係の参考書を読書室に架蔵することだったのでないか。それが用箋に「読書室蔵」と印記されていることの意味ではないかと思う。とすれば書写に際して亡羊・榕室父子による加筆・訂正もあり得たであろう。

「禽獸蟲魚草木考」が成立した文化十二年から榕室がそれを書写した弘化二年までの三〇年間に本草学界は目ざましい発展を遂げていたし、亡羊・榕室父子は義兄よりも広汎な本草学の知識を身につけていたはずである。書写に際しての加筆・訂正も少なからずあったのではないかと思う。「禽獸蟲魚草木考」の後半部に頻出する「案」は亡羊・榕室父子の考説ではなかったかと推測する。

そして「抄説」として引用されている蘭山の所説も後半部に至ると、蘭山の「本草綱目啓蒙」の文面と全く同一である個所がふえてくる。つまり、「啓蒙」を参照しての引用であると思われる個所が多くなる。それは「案」が頻出すると並行している。義兄は直接「啓蒙」を参照していない筈だから、別人（つまり、山本父子）の加筆があったのではないかと推定される。

以上、「禽獸蟲魚草木考」の後半部には、山本亡羊・榕室父子による加筆、訂正や草稿の整理がかなりなされているように思う。

「知要」・「抄説」が複数の人達の考説の所産であり、それらを参照している「禽獸蟲魚草木考」の原著（原著があつたと仮定して）はいわば複数人の手になる著書である。その原著をさらに現存の形に書き上げたのは山本亡羊・榕室父子である。「禽獸蟲魚草木考」は複数人の思考の産物と言えよう。次に「小林義兄と山本榕室関係年表（附表二）」を参考のために掲出しておく。

附表（一）小林義兄と山本榕室関係年表

西曆	年号	事項	備考
一六九〇	元禄 三		契沖「萬葉代匠記」（精選本）成立
一七〇九	宝永 六		益軒「大和本草」（卷一）刊

一七二四	正徳四		稲生若水「新校正本草綱目」刊
一七三〇	享保一五		本居宣長生
一七四三	寛保三		小林義兄生
一七五七	宝曆七		賀茂真淵「冠辞考」刊
一七六九	明和六		◇ 「萬葉集考」刊
一七七八	安永七		山本七羊生
一七九〇	寛政二		宣長「古事記伝」刊行始まる
一七九六	◇ 八		深根輔仁「本草和名」(九一八成立)刊
一七九七	◇ 九		宣長「玉勝間」(十の巻)成稿
一七九九	◇ 一一		彦根藩国産方設置・藩校設立
一八〇一	享和元		宣長没
一八〇三	◇ 三		小野蘭山「本草綱目啓蒙」刊行始まる(一文化三)
一八〇六	文化三		小林義兄「湖魚考」成立(六四歳)
一八〇九	◇ 六		(亡羊二男) 山本榕室生
一八一五	◇ 一二		義兄「萬葉集禽獸魚草木考」成立(七三歳)

一八二二	文政四		義兄没(七九歳)	
一八三二	◇ 五			「萬葉勅植考」著者伊藤多頼没
◇	◇			宣長「古事記伝」刊了
一八三三	◇ 六			春登「萬葉集名物考」成立
一八二七	◇ 一〇			荒木田嗣興「萬葉集品類鈔」成立
◇	◇			鹿持雅澄「萬葉集品物解」成立
一八四一	天保二			西門蘭溪「萬葉草木考」成立
一八四二	◇ 一三			雅澄「萬葉集古義」全巻成稿
一八四五	弘化二		榕室「萬葉集禽獸魚草木考」書写(三七歳)	
一八四八	嘉永元		榕室「湖魚考」書写(四〇歳)	
一八五四	◇ 七		榕室「湖中産物図証」書写(四六歳)	
一八五九	安政六		亡羊没(八二歳)	
一八六四	元治元		榕室没(五六歳)	

3

「例言」にある「文字異ナルハコトククアゲ 同ジ文字ナルハ

アゲズ」という方針によって「来鴨」(歌番号二六七)の「鴨」や「物恋之伎」(六七)の「之伎」までを鳥名としてあげていることは先にも述べた(三〇頁)。同じような例として、「卯名手之神社之」(二三四)の「卯」を鳥名(鵝)としてあげているが、これは地名「雲梯」(奈良県橿原市)の音仮名表記の一部である。

ところで、義兄は「鴨妻」(二五七)はカモメとして一語に訓んでいるが、今日の解釈では「鴨妻」と二語に訓んでいる。しかし、鳥類学者の中西悟堂はこれを鵝として、元来海鳥であるこの鳥が内陸ふかく埴安の池あたりまで飛来・棲息することを生態的観察によって実証しているから、一語説を一概に退けることも出来ないであろう。

また、義兄がテキストとして使用した寛永版本では巻六の「水鳥」(九四三)をウと訓じ、巻十九の「水鳥」(四一八九)もウと訓じている。表記の違いはあるが、訓は同じである。義兄は前者の「水鳥」をも「水鳥」と書き改めて抜き出している。一見乱暴のように思えるが、寛永版本四一八九の題詞をみると「水鳥」と表記し「ウ」と訓じている。つまり、版本も「水鳥」・「水鳥」ともに「ウ」と訓んで表記には抱いていないのである。四一八九で題詞が「鳥」、本文が「鳥」と表記されている写本としては元暦校本・類聚古集・西本願寺本・紀州本などがある。平安時代以来伝統的に「水鳥」も

「水鳥」もともに「ウ」と訓じてきたのではないか。「鳥」は「鳥」の誤りとして誤字説を唱えたのは契沖(『萬葉代匠記』七・精撰本)で、現代ではこの誤字説が通用している。しかし、「水鳥」を「ウ」と訓ずることの是非は誤字説だけで片付かないものがあり、是非を再検討することのヒントを義兄は与えてくれていると言えるだろう。

また、義兄は「天飛也輕乃社之」(二五六)の「輕」を鳥名としてあげ、「輕ハ借字ナリ正字不知 小カモノ一種ノ方言ナリ」としている。現代ではこの「輕」を「雁」と解釈しているものが多い。しかし、これも「雁」と即断は出来まい。「古事記」歌謡の「あまだむ輕の娘子」の語義の解明から始めなくてはならないだろう。

鳥類の問題点のみかたよったが、獸類・虫類・魚類・草類・木類などすべての領域で未解明の問題点は多く、義兄の書は再検討のためのヒントを与えてくれる。「文字異ナルハコトゴクアゲ」ることによって品物の一種と認めたいものも混入することになったが、万葉集の動植物について全体的な鳥瞰図を我々に与えてくれることにもなった。

近世の万葉研究は鹿持雅澄(寛政三年(一七九二)生、安政五年(一八五八)没)によって集大成されたとよく言われる。『萬葉集古義』が彼の総決算であるならば、品物研究の集大成は古義附録の『万葉集品物解』(五冊)であろう。「品物解目録」と私に作成し

た「禽獸蟲魚草木考目錄」(附表(三))を比較対照してみると、「品物解」にあって、「禽獸蟲魚草木考」にない品物が二、三あり、逆に「禽獸蟲魚草木考」にあって「品物解」にない品物もある。植物に関しては、義兄が草類に分類しているものを雅澄が木類に分類しているものが約一割ほどある。動物に関しては、義兄が魚類に含めているものの半数近くを雅澄は虫類に分類している。「湖魚考」の影響もあって、雅澄が虫類に分類している「亀(爬虫類)・「蝦(両棲類)」や貝類(軟体類)を義兄は魚類に含めているために食い違いが生じている。しかし、動物全体の合計数には大きな差はない。左表(二)によっても明らかのように品物全体(総数)の差はわずかに三である。万葉集中の品物の抜き出しに関して、義兄は雅澄に較べて遜色がないと言えるよう。

附表(二) 品物掲載対照表

項目	品物解	禽獸蟲魚 草木考
草類	86	100
竹類	4	
(小計)	(90)	(100)
木類	68	52
(植物合計)	(158)	(152)
鳥類	36	36
獸類	10	11
魚類	9	20
虫類	19	10
(動物合計)	(74)	(77)
総計	232	229

雅澄は文献考証学者的な色合いが濃い。「品物解」の中で引用し

ている和漢の古典籍や辞書類は膨大なものであり、義兄のそれとは比較にならない。しかし、本草学関係の書に限定すると、種類はそれ程多くはない。本草学関係の参考書として引用されている書名・人名で圧倒的に多いのは小野博(蘭山)(一五〇回)、「和名本草」(九六回)、貝原篤信(益軒)(七九回)である。その他に二回以上引用されているものとしては、「康頼本草」、「医心方」、「本草綱目(時珍)」、「本朝食鑑」などである。その種類は義兄の書に比してそんなに多いものではない。

明治初期の万葉学者であり、宮内省文学御用掛であった近藤芳樹(享和元年(一八〇一)生、明治十三年(一八八〇)没)らの努力により、明治十三年、「古義」版本が宮内省から出版され、明治二十三年に全巻完結したことで、近世江戸期の万葉学はその成果を世に問うたのである。近世の万葉学の欠陥とその限界を批判し、克服することで近代万葉研究は成立したと言える。雅澄の「古義」はそのスタート台であったとも言えよう。品物の研究にあっても「品物解」は近代のスタート台であった筈である。本草学の限界を批判・克服し、新しい近代の植物学・動物学の知識を導入することで近代の万葉博物学は成立した。近代のスタート台として「禽獸蟲魚草木考」も「品物解」と同レベルの存在価値を有しているはずである。

〔注〕

(1) 講座国語史3『語彙史』(大修館 昭和四三年) 第五章「近代の語彙II」の「學術用語」(島田勇雄) 参照。

(2) 白井光太郎考注『大和本草』(有明書房 昭和五〇年復刻版)

序文「博物学者トシテノ具原益軒」参照。

(3) 前掲書(2) 参照。

(4) 前掲書(1) 参照。

(5) 上野益三『日本動物学史』(八坂書房 一九八七年) 第二章「一九世紀前半のわが動物学」三「生態」及び上野益三『日本

動物学史』(平凡社 昭和四八年) 年表(四四九頁) 参照。

(6) 国立国会図書館・白井文庫本『萬葉集禽獸蟲魚草木考』(三

卷三冊)の上巻のみが第一六巻に複製されている。(日本図書セ

ンター 一九九一年)

(7) 滋賀県教育会編『近江人物志』(滋賀県教育会 大正六年)

参照。

(8) 石井良助監修『編年江戸武監』シリーズの「文化武鑑一」

(柏書房 昭和五六年) 参照。

(9) 『本居宣長全集第二十卷』(筑摩書房 昭和五〇年) 参照。

(10) 読書室は山本亡羊の父封山が西本願寺の法主文如上人から上

人の学問所「読書室」と号する一堂を与えられ、油小路通五条の

自邸に移築した建物である。山本家の学問所であり、講義室であり、物産会の会場としても水く使用された。

(11) 『東アジアの本草と博物学の世界(下)』(思文閣出版 一九

九五年)の高橋達明「小野蘭山本草講義本編年攷」参照。

(12) 同右

(13) 難波恒雄・遠藤正治編(山本亡羊原著)『百品考』(科学書院

昭和五八年)の巻末附録「読書室著書遺稿目録」によれば、榕

室単独の写本は二八部(一三八冊)が挙げられている。亡羊校訂・

榕室書写を加えればもっと多くなる。

(14) 岩瀬文庫蔵『藤居重啓撰 湖中産物圖證』(上・中・下三冊)

二〇三七・四五・二四)も山本榕室が嘉永七年に書写したもの

である。下巻末の跋に「寫就共二部 一以藏於家一以分寒泉西村

氏」とある。西村氏は伊勢出身の本草家西村広休(文化一三年へ

一八一六)生、明治三二年(一八八九)没)のことである。

(15) 元暦校本は原文「物恋之鳴毛」とあり、西本願寺本は「物戀

鳴毛」、寛永版本は、「物戀之伎乃鳴事毛」とある。古来より原文

に脱字があるとされ、種々補筆されてきた個所である。訓にも諸

説がある。

(16) 『日本古典文学大系 本(岩波書店)・日本古典文学全集』

本(小学館)など。

(17) 『萬葉集大成8民族篇』(平凡社 昭和二八年) 中西悟堂「萬葉集の動物」二 参照。

(18) 日本古典文学大系本『萬葉集一』(五四三番)の頭注は「天飛ぶや」は「空を飛ぶ雁の意から軽にかかる」枕詞とし、日本古典文学全集本『萬葉集3』(二六五六番)の頭注は「天飛ぶや」は地名「軽」の枕詞とし、「古事記」下の歌謡に「あまだむ軽の娘子」とあり、その語義未詳の枕詞を天飛ブ——雁と解してかけたもの」と記している。

(19) 大久保正『萬葉集の諸相』(明治書院 昭和五五年)第七章二「万葉研究史」参照。

附表(三)『萬葉集禽獸蟲魚草木考』(狩野文庫本) 目錄

No.	項目	
1	かまめ	加萬目・鴨妻 (上巻) 禽部・卷一
2	ぬえこどり	奴要子鳥・宿兒鳥・奴延鳥・奴要鳥
3	う	鶺鴒・宇・卯・鷓・水鳥
4	かも	鴨・水鴨・鴨鳥・麻可母・乎加母・可母・可毛・奥鳥鴨・多知許母
5	たかべ	高部
6	をし	男為鳥・乎之・乎之籽里・鶯
7	かる	輕
8	あきさ	秋沙
9	にほどり	ニ宝鳥・爾保鳥・丹總鳥・爾保籽里・柔保等里・爾保騰里・也左加籽里
10	あぢ	安治・味・阿遲・阿知・安治牟良
11	みさこ	美沙・水沙兒・三佐具・三沙具
12	よぶこどり	呼兒鳥・喚兒鳥・喚孤鳥・喚子鳥・執ヨブコドリ
		7
		6ウ
		6
		5ウ
		5ウ
		5
		4
		4
		3
		2ウ
		1ウ
		1
		丁姿

4	3	2	1			11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
かつを	しび	すずき	たひ			うし	とら	きつね	をさぎ	あらくま	いぬ	ざる	むささび	しし	しか
堅魚 <small>カッポ</small>	鮪 <small>シビ</small>	鈴寸・須受吉 <small>スズキ</small>	鯛 <small>タイ</small>	(上巻) 魚部・巻三		牛・事負乃牛 <small>ウシ</small>	虎	狐 <small>キツネ</small>	乎佐藪 <small>ササギ</small>	荒熊	犬・伊奴	猿	牟佐佐婢・牟射佐妣・武佐左妣 <small>ムササビ</small>	鹿猪・鹿 <small>シシ</small> ・十六・完 <small>シシ</small> ・肉 <small>シシ</small> ・四時 <small>シシ</small> ・思之 <small>シシ</small>	鹿・小牡鹿 <small>シカ</small> ・狹尾牡鹿 <small>シカ</small> ・左男鹿 <small>シカ</small> ・左牡鹿 <small>シカ</small> ・佐平思賀 <small>シカ</small> ・草平思香 <small>シカ</small> ・佐男鹿 <small>シカ</small> ・男鹿 <small>シカ</small> ・牟牡鹿 <small>シカ</small> ・竿志鹿 <small>シカ</small> ・左平志鹿 <small>シカ</small> ・臥鹿 <small>シカ</small> ・鳴奈流鹿 <small>シカ</small>
35ウ	35ウ	34ウ	34			32ウ	32ウ	32	31	31	30	29	28ウ	28	26ウ

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	
かはづ	わすれがひ	あはびたま	あはび	しじみ	しただみ	うつせがひ	みな	かめ	みづち	いさな	むなぎ	ひを	あゆ	ふな	つなし	
河津 <small>カハズ</small> ・河蝦 <small>カハズ</small> ・河豆鳴 <small>カハズ</small> ・川津	忘貝 <small>ワスレガヒ</small> ・和須札我比 <small>ワスレガヒ</small> ・胡非ワスレ貝	鮎珠 <small>アハビ</small> ・鮎玉 <small>アハビ</small>	鮎魚 <small>アハビ</small>	四時美 <small>シジミ</small>	小鯨 <small>シタダミ</small>	打背貝 <small>ウツセガヒ</small> ・石花	蟻 <small>ミナ</small> ・美奈 <small>ミナ</small> ・弥那	亀	蛟龍 <small>ミヅチ</small>	鯨魚 <small>イサナ</small> ・勇魚 <small>イサナ</small> ・不知魚 <small>イサナ</small> ・伊佐魚	武奈伎 <small>ムナギ</small>	氷魚 <small>ヒヨ</small>	阿由故 <small>アユ</small> ・鮎 <small>アユ</small>	年魚 <small>アユ</small> ・年魚小 <small>アユ</small> ・阿由 <small>アユ</small> ・和可由 <small>アユ</small> ・安由	藻臥東鮎 <small>アハビ</small> ・尿鮎 <small>アハビ</small>	都奈之 <small>ツナシ</small> (鮎ノ古名也)
44ウ	44	43ウ	43	42ウ	42ウ	42	41ウ	41	40	39ウ	38ウ	38	37	36ウ	36	

2	1			10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
あさ	あかね			さばへ	あきつ	かに	ほたる	まゆ	こほろぎ	すがる	ひぐらし	くも	たにくく	
打麻懸・續麻成(續は續の誤也)	茜草・安可称・赤根	(中卷) 草部・卷五		五月蠅	秋津羽	河爾	螢	眉・養蚕之眉・爾比具波麻欲・養蚕・桑子	蟋蟀	須輕・為輕・腰細	日晚・鳴蟬・比具良之・日具良之	久毛	多爾具久・谷潜狹渡	(上卷) 蟲類・卷四
1ウ	1			55	54	52	51ウ	50	49	48	47	46ウ	46	

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	
たばみづら	はまつづら	やまつづら	あをみづら	たまかつら	まさきづら	さなかづら	いはるつら	いね	あやめ	おほる	あは	あし	あさかほ	あさち	な	
多波美豆良	波麻都豆良	夜麻都豆良・夜麻可都良	青角髪	玉葛・多麻可豆良・玉纒	冬薯預葛・冬蔽預都良	狭名葛・狭根葛・佐奈葛・真玉葛・都豆良	伊波為都良	秋田苧・湯種・蕨	伊禰・稲葉・秋田之穂・苗代・早穂・穂・秋之田之穂・早田・殖之田・宇恵之田・秋田苧・湯種・蕨	葛蒲・昌浦・安夜女具佐	葵・於保為具左	粟・安波	葦・葦邊・葦原・安之・安之我知流	朝貌・安佐我保	浅茅・茅花・浅茅原	葉・朝葉・春葉・薺薺・漬葉・安佐奈
15	14ウ	14ウ	14	13ウ	12ウ	11	11	9	8	6ウ	6	4ウ	3ウ	3	2	

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	
かたかご	かきつばた	おもひぐさ	ゆふかげくさ	うり	うはぎ	うけら	からある (くれなる)	やまある	かほばな	やましたひかけ	つぬさはふ	いはつな	つた	くず	くそかづら	
堅香子花	垣津幡・垣津旗・垣幡	思草(平花我下乃思草ト云リ)	暮陰草	宇利	宇波疑・菟芽子	宇家等我波奈	幹藍・韓藍之花・鶏冠草花 紅・久礼奈為・末採花	山藍	容花・可保婆奈・可保我波奈・貌花	夜麻之多日影・衣可多伎可氣	角節經・角障經	石網	延都多・延津田・波布都多	真葛延・葛引・延久受・波布久受	延葛・田葛葉・延田葛・葛原・夏葛・	屎葛
24	23	22ウ	22ウ	22ウ	22	20ウ	19ウ	19ウ	19	18	17ウ	17ウ	16	15ウ	15	

49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	
しりくさ	しばくさ	しぬぶぐさ	しだくさ	さきくさ	こけ	くくみら	くくたち	ひえ	きみ	かや	わた	ゆふ	をぎ	はなかつみ	
知草	志婆草	之努布草	子太草	三枝	蘿席・蘿・蘿生・薛生	久君美良	九久多知	稗・比要	寸三(黍ナリ)	刈草・草原・武路我夜	加夜・草・荊草・柞自路多可我夜・茅草荊・	綿・和多	真蘇木綿・短木綿・木綿花 木綿・真木綿・白木綿花・浦ノ濱木綿・	荻・濱荻・佐左等乎疑	花勝見
34	34	33	32ウ	31ウ	31	30ウ	30	29ウ	28ウ	28	28	26ウ	26ウ	25	

59	58	57	56	55	54	53	52	51	50
なのりそ	なでしこ	なぎ	つちはり	つきくさ	たで	せり	をばな	すすき	すげ
莫語之花 奈乘藻・名告藻・勿謂藻・莫坐藻・莫謂花・	瞿麥・石竹・奈泥之故・奈弓之故	水葱ノアツモノ	土針	月草・鴨頭草	穂蓼・水蓼・八穂蓼	芹子・世理	波都乎花 尾花・乎花・美草・草花・波都乎婆奈・	波太須酒寸・者田為為寸・波奈須々伎・為酢寸・須々伎・須々吉・細竹為酢寸（細竹ハ借字ニテシナエススキ也）	菅・白菅・根夜波良古須氣・多麻古須氣・夜麻須我乃称・山菅之根・靜菅・子菅・小菅・古須氣・菅葉・磐本菅・須我乃根・菅実・菅根・山菅・夜麻須氣
44ウ	42ウ	41ウ	41	40	38	37ウ	37ウ	36ウ	34ウ

76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60
むらさき	むぐら	こも	まめ	ふちばかま	ひる	まぐ	ひし	はちす	うきぬなは	ねつこくさ	にくぐさ	も	あしつき	め	みる	なはのり
紫・紫草・紫ノ根延・牟良佐伎	牟具良	薦苳・薦・苳薦・其母・麻乎其母	麻米（ハフ豆トス）	藤袴	蒜	恵具	菱	蓮・蓮葉	浮草	根都古具佐	似兒草・爾故具左・爾古具佐	玉藻・珠藻・多麻毛・川藻・多麻藻・息津藻・與藻花・菅藻・伊都藻之花・海藻	葦附	稚海藻・和海藻・和可米・軍布・海藻	美留・俣海法・深海松	細乘・繩法
			53	51ウ	51	50	49ウ	49	48	48	47ウ	46ウ	46ウ	46	45ウ	45

89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77
うも	みすず	あぢさゐ	をみなへし	すみれ	はぎ	さいはり	さわらび	わすれぐさ	よもぎ	ゆり	やまぶき	ももよぐさ
宇毛 <small>ウモ</small>	水蓼・三蓼 <small>ミズアサギ</small>	安治佐為・味狭藍 <small>アヂサガヒ</small>	乎美奈散之 部為・娘部・女郎花・姫押・姫部志・	須美礼・都保須美礼	波疑・芽古枝・波里波良・岸野之襟・襟原	先茅之花 <small>サキカゲ</small> （古訓ハツハキト云り誤り也）	左和良妣	葎草・恋忘草 <small>ワスレグサ</small>	余母疑	佐由利能波奈	夜由理・草深由利・左由利・姫由理・ 夜萬夫吉	山吹乃花・山振・夜麻扶枳・夜麻夫伎・ 母母余具佐 <small>モモヨクサ</small>
69	68ウ	68										

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90
ぐさ	むぎ	うきくさ	あきのか	わかくさ	めざましくさ	やまぢさ	なよたけ	しぬ	つつじ	いちし
鬼之志許草 <small>オニシコ</small>	武藝・牟伎・麦 <small>ムギ</small>	浮沙生 <small>ウキサナ</small>	秋香 <small>アキノカ</small>	和草	目不醉草 <small>メバサシクサ</small>	山治左・山萵苣・知左能花	奈用竹・名湯竹 <small>ナヨウタケ</small>	細竹・小竹・小竹之葉・宇恵多氣 <small>ホソタケ</small>	都追慈花 <small>ツツジ</small>	壹師ノ花 茵花・石管自・丹管士・石乍自・白管士 <small>イツシノハナ</small>
76ウ	75	74	74	73ウ	73	72ウ	72	71ウ	70ウ	70ウ

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
つばき	うのはな	しひ	まき	ひばら	つるばみ	ひさき	はねず	さくら	まつ		
山海石榴 椿花・都婆伎・ツラツラ椿・海石榴・	于花・宇能花・宇乃花	椎・四臂・四比乃伎夜提云佐要太	真木・真木・真木ノハ・真木サク 真木ノツマテ	檜原	椴・都流波美	久木・濱久木・若歴木	唐棣花・波祢受・翼酢・	佐久良婆奈・佐家流佐久良・櫻皮	櫻花・櫻・作樂花・山櫻花・夜麻左久良婆奈・ 許大流木乎麻都・和可麻都・麻都能波奈	松・麻都・小松・子松・松原・松反・ 松ヶ根・松之根・松樹・松之木・松影・ 濱松・松之葉・一松・君松樹・松カ枝・ 松之佐枝・結松・麻都我延・玉松・麻都能 氣・荒磯松・伊蘇麻都・末都我根・	(下巻) 木部・巻六
8ウ	8	7ウ	7	6ウ	6	5ウ	4	2ウ	1		

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	
むろのき	ふぢ	ねぶ	あしび	うめ	つがのき	すぎ	かへるで	もも	やまたちばな	あべたちばな	たちばな	やなぎ	
天木香・室木・牟漏能木・室乃樹	藤・布治・藤ノ花・敷治・布治奈美・藤浪	合歡木	馬酔木花・安之婢之波奈	梅樹・若樹梅・若木乃梅・烏梅能芳奈・梅柳 梅・梅花・烏梅・干梅・宇梅・宇米・汗米・	櫻木・都賀乃樹・刀我乃樹・都我能奇	杉・須藪・須疑・杉村・杉原・杉枝・銚相	蝦手・若楓・和可可敵流氏	桃樹・毛桃・桃花	山橋・夜麻多知波奈	阿倍橋	殖木橋花・時自久能香久乃菓子 橘・橋花・安可流橋・花橋・波奈多知婆奈・	可伎都楊疑・伊都母等夜奈积(五本) 左須楊奈疑・楊奈疑・安平楊疑・柳乃宇礼・ 安平楊木・春楊・垂柳・可伎都楊疑・刺楊・ 柳・青柳・川楊・河楊・青楊・安平夜直・	
23ウ	23	22ウ	21	19	18	17ウ	16	14ウ	14	13	11ウ	10	

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24
こなら	つき	しきみ	あからがしは	あづさ	つげ	ほほがしは	かへ	すもも	ゆづるは	くり	かし	ははそ	もむにれ	えのみ	このてがしは	なし	なつめ
許奈良	槻木・百兄槻木・五十槻・殖槻	之伎美我波奈	安可良我之波	梓・梓弓	黄楊	保宝我之婆	柏	李花	由豆流波	久利・三ツ栗	樞・イツ可新	母蘇・波播蘇・波波蘇	モム爾礼	榎実	兒手柏・古乃豆加乃波	成	棗
38ウ	38ウ	37ウ	36	35ウ	34ウ	33	32	31ウ	30ウ	30	29ウ	28ウ	27ウ	27	26ウ	25ウ	24ウ

① 下段の算用数字は丁数、ウは裏。
 ② 品目の漢字は原文のまま、ルビも原文のまま。

52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42
いつしば	ほよ	くろき	ちちのみ	まゆみ	たへ	つみ	おみのき	さかき	あふち	かづのき
五柴・市柴	保余	黒木	知智万実・知知能未乃	榎	栲	柘	臣木	賢木・神樹	阿布知	可頭乃木
48	47	47	45	44	42	41ウ	41ウ	41	40	39

附表(四)

『萬葉集禽獸蟲魚草木考』(狩野文庫本) 引用書目一覽表

	〈辭書・事典〉	卷上	卷中	卷下	計
和名抄	六〇	五八	三八	一五六	
字彙	八	五	一三	二六	
和漢三才圖會	二	一	一	四	
五雜組	一		一	二	
正字通			一	一	
爾雅			一	一	
爾雅翼			一	一	
通雅			一	一	
爾雅郭璞注			一	一	
博物志	一			一	
積名			一	一	
積名注			一	一	
広東新語		一		一	
康熙字典			一	一	
東方医鑑			一	一	

	〈本草学〉	卷上	卷中	卷下	計
本草綱目	四八	四五	四三	一三六	
抄説	四八	四八	三五	一三一	
知要	三〇	一三三	一四	六七	
考	四〇	一三三		六三	
案		一三三	二〇	四三	
貝原篤信	四	一	一	六	
松岡玄達	一	三	一	五	
蘇敬		一	三	四	
稻生若水		一		一	
本朝食鑑	一			一	
本草原始		一		一	
本草拾遺		一		一	
本草彙言		一		一	
花鏡		一		一	
陶弘景		一		一	
湖魚考	一			一	
鷹經弁疑論		一		一	
詞草小苑		一		一	
方書		一		一	

催馬楽	拾遺集	古今集	枕草紙	源氏物語	伊勢物語	〈日本古典文学〉	荷田東磨	田中道磨	荒木田久老	契沖	賀茂真淵	〈国学〉	物産家	中養父大人	吾友廣根	北山医話	卷上	卷中	卷下	計
二	二	一	一	一	一		一	二	一	一二	八				一					
二	一	一		一						一三	三三三									
									一	七	一四			二	一	一				
四	一	三	一	一	一		一	二	二	三二	五五			二	一	一				計

吉部秘訓抄	伊勢氏	〈有職故事〉	芝屋隨筆	秋斎(多田義俊)	華陽皮相(金沢元愷)	閑田耕筆(伴高暎)	〈隨筆・日記〉	言塵集(今川了俊)	土佐日記季吟注	伊勢物語闕疑抄	河海抄	和歌童蒙抄	能因歌枕	為家卿	八雲御抄	古今六帖	卷上	卷中	卷下	計
					一	一			一				一							
								一		一	一	一			一	二				
一	一		一	一	一	一														
一	一		一	一	一	一		一	一	一	一	一	一	一	一	二				計

年中行事絵巻				卷上
〈漢文学〉				卷中
新井白娥	二	五		卷下
詩経	二	一	三	計
詩経ノ注			一〇	
詩経ノ説約		一	一	
論語古注			一	
論語朱注			一	
三体詩			一	
陸機			一	
輟耕録 <small>(中国怪奇小説 宋周師編)</small>			一	
〈史書〉				
日本書紀	五	二	四	一一
古事記	四		二	六
延喜式 <small>(祝詞)</small>	二	二	一	五
続日本後紀	一		一	二
大鏡裏書		一		一

今鑑				卷上
〈その他〉 〈不明の人名〉				卷中
	一	五	四	卷下
			一〇	計

①漢数字は引用回数。
②人名で引用されているものは人名を掲載。